

すっぽんぽんで若い男女入り乱れ！本能とカラダを全開にさらけ出す〇学生仲良しクラスメイトの男子生徒4人と専門学校へ通うお姉さん5人

貸し切り状態の田舎の露天風呂でセックス盛りの見知らぬ男と女が出会い、どこまでも自由にっ！大胆にっ！大乱交！！

「チャリンッ！！チャリンチャリーーンッ！！」

大きな自転車の右グリップの根元に取り付けられた灰色のベルが鳴る。

意図的に鳴らしたわけではない。坂道を上り終え、息を切らした優斗（ゆうと）の手が震えたのだ。

「エッ！ホッ！・・・・ンハッ！ハアッ・・・・」

「・・・・ンハアッ・・・・ようやく到着したあああつ！！」

優斗は少し無茶をした。

坂の勾配（こうばい）と長さを甘く見て、自宅にあったママチャリでやって来たのだ。

一方で幸也（こうや）と智広（ともひろ）と良（りょう）は自分のマウンテンバイク。

優斗はマイ自転車を持っていなかった。

この日、4人は街の端っこにある大きな山の裾（すそ）にある天然温泉へとやって来た。

裾とは言っても、登山ほどではないにしろ坂は大分上らなければならない。時間も体力も必要だった。

4人の額や首筋、Tシャツの中には大量の汗。

まだ夏場に入るには2ヶ月ほどあるため気温はさほどではないが、まず山へ来るだけでも長距離、そこから更にそこそこの距離、坂を上らなければならない。これだけ走ると大変な運動量だ。

「だけど嬉しいぜっ！！温泉はこの街にあるけどこれまで来たことなかったんだっ！」

到着し、優斗が感嘆の声を上げる。

「俺もだよっ！！でも確か良は一度来たことあったんだっただったな??」

汗をぬぐいながら智広が良に問いかける。

「ああっ！一度父ちゃんとなっ！」

爽やかな笑顔を浮かべながら良。

太陽の光は燦燦（さんさん）と深緑の木々が茂る山に降り注いでいる。

「じゃあ早速入ろうぜええっ！！」

声変わりを終えたばかりの全員が声を揃える。

4人は現在〇学2年生の中睦まじい同じクラスメイトだ。

4人は駆け足で温泉へと向かった、

天然温泉は全体が露天風呂になっており、浴場のそばに休憩所と脱衣所を兼ねたログハウス風のこじんまりした小屋が設けられている。

4人は楽しみにしていた露天風呂への入浴を前に、素早く着替えを済ませる。

「オッケューー！！これですっぽんぽんだっ！」

「だなっ！！俺たちスッポンポンッ！！」

良と幸也が自信たっぷりに叫ぶ。

その小屋を出たところに据え置き（仮設）の小さなシャワールームが3つだけある。大自然の中、石の湯船で入浴を楽しむということが唯一と言っていい特色の、完全な露天風呂のみが”売り”の温泉だ。

そして、“ちなみ”にこの露天風呂は

混浴

である。

「うへっ！だけどちょっとヒンヤリしねえーかあ？？汗が一気に吹き
飛ぶぜっ」

「そうだなあっ！！」

元々高地にある4人が住むバナナ町。昼間は暖かいが、山を少し上ると裸ではこの季節まだ寒さがあり、長距離自転車を漕いでかいた汗は一気に乾いてしまった。

肌をなぞる高地のひんやりした空気に、4人に鳥肌が立つ。

「だけど、楽しみ楽しみい！！露天風呂っ！！」

「入ろ入ろおおっ！！！」

この温泉は多種多様の効能を持つ乳白色（にゅうはくしょく）の濁り湯。

底の見えない真っ白な湯から延々と湯気が立ち上っている。

鳥肌が・・・・。

立つ。

湯気が・・・・。

たち上っている・・・・。

立ちのぼっている。

立つ。

.....。
.....。
.....。

ビィー——ンツツ！！

モヤモヤとした実体が曖昧な白い湯気よりも、
ずっと
“具体的”
に立っているものがあつた。

それは.....。

”ペニス”だ。

この温泉にクラスメイトの友人3人を誘い出した、今回のミニ日帰り温泉旅行の幹事である優斗のペニスだ。

優斗のペニスはお腹にへばりつくほどに勃起し、その長太さを目一杯主張しているかのよう。亀頭がへその上辺りにツンッ、ツンッ、と一定のリズムでひっついてヒクヒクしている。

り返った裏筋が正面からでも丸見えだ。

.....しかし、そばにいる他の3人は特段気にも留めない。
日常の当たり前の現象だからだ。
そう。

思春期の真っ只中を突っ走る4人にとっては、勃起など授業中でも登

下校中でも、部活中でさえしょっちゅう起こりうる当たり前の生理現象なのだ。

毎日大量の夢精で下着に留まらずシートまでビショビショに濡らし、なおも目覚めた時は朝だちで最大限にビンビンになっている4人のことだ、もはや不思議でも何でもないことなのであった。

・・・・・・・・・・とっっ！！！！

そんな4人の目の前に**淫らな”女体”**が5つほどあった。

丁度4人が入ろうとしている湯船の石縁側とは反対側に、湯船に足をつけたり肩まで浸かっていたりしている5つの**女体**と思しき肌色があった。

遠くに見えるその肌色はモクモクと立ち上り続ける白い湯気でかすれている。

・・・・この天然温泉は暖かくなってきたこの季節では利用者もわりかし少なく昼間でも貸し切り状態になることが多いのだが・・・・。

彼女たちは医療関係機関での仕事を目指すこの街の若者たちが通う小さな**看護専門学校**の5名の学生たちだった。

名前は優里香（ゆりか）、若菜（わかな）、有紗（ありさ）、麗美（れみ）、愛奈（あいな）。

偶然この時間に、遊びも兼ねて広々とした露天温泉で羽を伸ばすため麗

美の車でここまで来ていたのだ。

年は“エロエロ少年グループ”よりも平均で●歳ほど上。

つまり少年たちにとっては**年上のお姉さん**だ。

お姉さんたちは少年グループが脱衣所の小屋を出てこちらに向かって歩いてきたことで、彼らが気付くより早くその存在に気付いた。

「・・・キャッ！！男の人たちが入ってきたみたいよっ！！」

「ほんとだっ！！若い子みたいっ！！」

そしてその瞬間からタオルで自分の大切なエッチな体の部位を隠す。

聴こえてくるヤンチャな声からしてまだ●●体型の名残すら完全にはなくなりきっていない華奢な若造たちとは予想できたが、やはり男は男。女性としての恥じらいによる条件反射のようなものだ。

もちろんイケイケの十代後半から二十代前半にかけての女子たちのことだ、自分たちだけの貸し切り状態ならこんな開放的な露天風呂で体を隠すわけではない。女同士全裸をさらけ出して楽しむに決まっている。

しかし、

女という生き物は

筋肉質で立派な成人の男たちだけが好きなわけではない。

だから、

まだ遠すぎてどんな少年たちかは分からないけれど・・・。

期待！！！！

「すっごく恥ずかしいわっ！！なんだか可愛い男の子たちっぼいよ！あたしたちよりずっと若いみたいっ！！」

近づくにつれ、向かってくる少年たちの姿形がリアルになっていく。嬉

しそうに声を上げるお姉さんたち。

小屋から湯船までは意外に距離がある。

先陣を切って湯船へ歩いてきた優斗と智広、そしてその少し後ろから駆け足気味に向かっていた良と幸也。

後ろの二人はまだ白い湯気の向こうのお姉さんたちの存在に気づいていない。よって良と幸也は、ブランブランッ！！と垂れ下がった状態でも

フィリピン産のバナナサイズはあるペニスを、一步一步足を前に進めるたびブラつかせているだけだ。

前述したように、優斗は”女体たち”に気付く前から自然勃起している。

そして優斗の横を歩く智広はお姉さんたちの存在に気付いて……。

ビィィーーンッッ！！！！

リーダーの優斗とほとんど同じ状態に！！

大きさも勃起の強さも反り返り具合も若々しさ抜群。

さすが同級生、二人とも肉棒全体から似通ったすごく強いエネルギーを発している。

広々としているため、いくらでも周囲を見渡せる露天風呂。
ただその視界を遮っているのは白い湯気のみであるため、残りの二人も
気づくのは時間の問題で……。

「うはっ！！えっ！！？？お、オナナの人たちいるじゃんっ！！？？」

結局、4人の少年……いや**男**たちの股間は皆、**戦闘態勢**になっ
っ！！

ビィー——ンツツツ！！！！

男4人、女5人。
計9人のこの微妙な年の差男女が大自然に取り囲まれた天然温泉のド
真ん中にいる。
その他にはひとつこひとりいない。

実に奇妙で不可解な空気バランスの、何かとんでもなく**凄いことが**
起こりそうな露天風呂であった……。

……………。

「きゃっ！！見てっ！！！！見てよお～～！！！！あの男の子たちのおち
んちんっ！！おつきい～～っ！！」

「うはあっつ〜〜！！！！すっ！？？すっごおおい
っ！！！」

専門学校に通うお姉さんたちは目を凝らして少年たちの股間を見つめながら黄色い声を上げる。

一気に男女グループの距離が近づいた！！

「おっきくなってるじゃんっ！！勃起勃起っ！！」

「ほんとおっ！すっごいねえ！！」

お姉さんたちの脚は半ば無意識に駆け足で少年たちに近づいていく。

ある程度の距離まで近寄ったお姉さんたちは、湯煙の間からもう一度少年たちのペニスを凝視！！

凝視！！凝視！！

そして、腕組みして頷くのだった。

「凄い凄い。やっぱ元気だわ。フムフム・・・」

「だよね、あれなら合格だっ！！よろしいよろしいっ！」

体験版はここまでです。

もし内容を気に入っていただけましたら、

続きを製品版でお楽しみいただけますと光栄です。